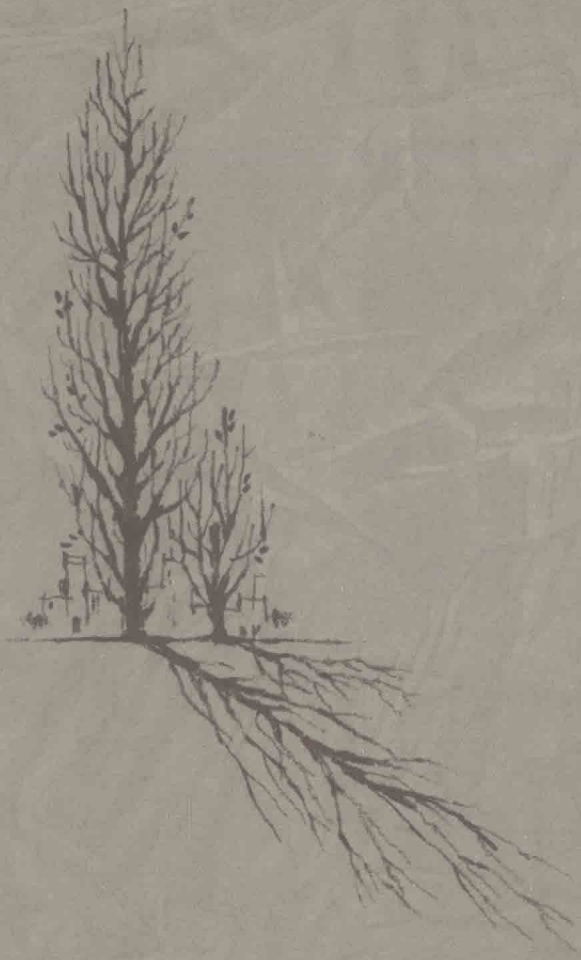
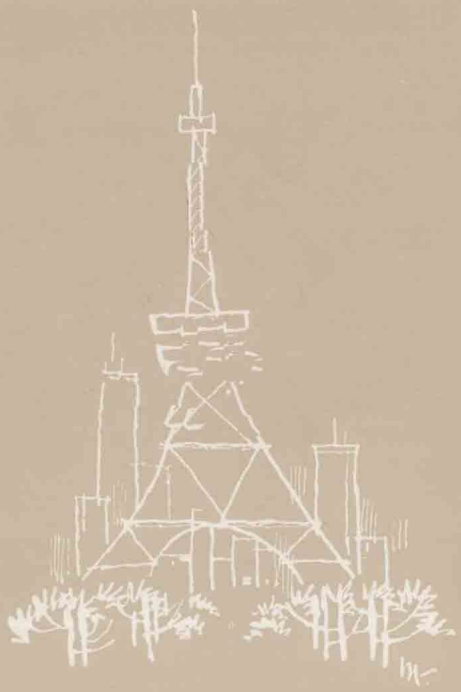


い分ちの言い分

黒井千次



新潮社

父たちの言い分

一九八一年六月五日印刷
一九八一年六月一〇日発行
著者　黒井千次
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　神田加藤製本株式会社
定価　一〇五〇円

© 1981, Senji Kuroi
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

父たちの言い分　目次

〔I〕親と子の現代
恥じらいの父子 9
親と子と戦争 28
父のためのタッチダウン 44
多胎児たちの時代 60
家族の森への踏み込み 74
必要家族と十分家族 81
家族の背景 84
〔II〕女たち、男たち
女十態 89
叱る女　嫁ぐ女　買う女　飼う女　待つ女
若い女　強い女　家の女　願う女　飛ぶ女
女性望見 109
危なくない女性たち　肩を持つ女性たち　出会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

う女性たち　ひとを待つ女性たち　121
破帽とギター　125
優しい男たち　128
男性とは何なのか

〔Ⅲ〕Thinking Life
腐るもの腐らぬもの　139
歩行と思索　144
ダルマサンガコロンダ　足と目と頭　揺れるもの摩れるもの　病院の廊下より　絶対者に向けて　歩行試行
時間と年齢　166
民話と電話と半市民　173
私の新聞批評　183
死をめぐる文章について　感動的シーンの扱い方

「父親殺し」をどう書くか　日曜日の新聞の顔

〔Ⅳ〕思い出の中の点景

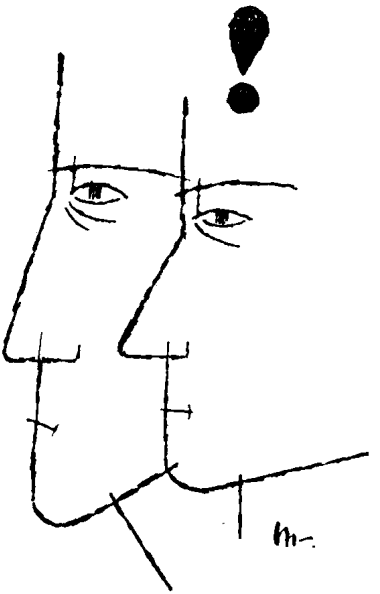
原っぱの周辺　201
昇れぬ階段　205
ポケットの夢　209
ある失敗　212
難問苦答　215
ロスト・サンデー　219
消えていく……　223
雨と雪と　227

あとがき　232
初出一覧　235

父たちの言い分

〔I〕

親と子の現代



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

恥じらいの父子

1

「母の日」なるものがある。五月の第二日曜日と定められている。アメリカで母の愛を感謝するために設けられたものであるらしい。「父の日」というものもある。同じくアメリカに発する父の恩に感謝するための日であり、こちらは六月の第三日曜日ということになっている。一九一〇年にドッド夫人が提唱して始まったのだそうだが、この人物がどんな女性であるのかぼくは知らない。また、「母の日」と「父の日」はどちらが先に生まれたのかもぼくにはわからない。

ただぼくにわかるのは、日本ではデパートによってこの二つの日がオーソライズされた、ということだけだ。その数日前にデパートに足を入れようものなら、全くあらゆる売場が「母」だらけ、「父」だらけである。いうまでもない、プレゼントの対象としての「父」や「母」が美しい飾りつけの向こうからおいでおいでをしているような感じなのだ。「父の日」に近いある日、ちょっとした買物をしようとデパートにより、売場を歩くうちにあまりに騒々しい宣伝に圧倒されて、自分で自分のものを買うのがなにか恥ずかしいような肩身の狭い気分にさせられた覚えがある。「父の日」や「母の日」はもういいから、「自分の日」という奴をつくってくれないか——

売場の真ん中に突っ立ってそんなことを叫び出したい気持だった。

デパートの商売材料になっているからとの理由によってだけではなく、ぼくは「父の日」とか「母の日」とか呼ばれるものが大変に嫌いだ。なんとなくわざとらしい。どこかに嘘がある。厳密にいえば、しかしこの嫌悪の情は特殊に日本的な事情からも発しているようである。本場アメリカでの「父の日」や「母の日」がどんな姿のものかをぼくは知らないけれど、どうもこの輸入はポップコーンやケンタッキー・フライドチキンのようにはうまくいかなかったのではあるまいか。なぜなら、父とか母とかいう存在は家族関係の中に生きているものであり、その家族の在りようが異なれば当然父や母の在りようも別のものとなっている筈だからだ。それなのに家族関係の差異を無視して父や母だけを移植しても、これはうまくいかないだろう。つまり、同じ「父の日」といっても、アメリカでの「父」と日本での「父」とはいささか趣を異にするところがあるのではないか。その結果、キャラバン・シューズで泥沼を歩くような奇妙な現象が起こってしまうのではなかろうか。少なくとも、父とか母とかいう名の一本の木を引き抜こうとした時、アメリカに比してわが風土では意外に根が横にも張っており、その木だけをすっきりと抜くことが困難なのだとはいえそうである。

わざとらしい、といえば、しかしぼくらの生活の中には、「父の日」「母の日」の外にも幾つもの似たようなものがあるのに思い当たる。たとえば、幼稚園や小学校の「父親参観」などもそれである。

ウイークデーでは見に来ることが出来ない父親のために、ある日曜日が特別に定められる。教科の内容そのものまでは特別のアレンジがされないかもしれないが、自分達とほぼ同数の父親達

に背後に立たれた子供達が平素と同じ態度で授業の受けられよう筈はない。おそらく教師にとっても事情は似たようなものだろう。いつも子供達がどんな様子で学校生活をおくっているのかその姿を見てもらおう、という意図は、厳密には実現不可能のこととなる。それは現状では止むを得ないのかもしれない。また、多少の演出がおこなわれたとしても、いつもは家庭の中でそこにだけ注目して見ている我が子を、クラスの子供達の中で相対化して眺めることが出来るという意義は親にとっても小さなものではない。だから、父親参観そのものが下らないとかつまらないとかいうつもりはない。

しかし、そう思っているにもかかわらず、参観日と定められたあの日曜日の午前中の白々とした欺瞞性を打ち消すことはやはり出来ない。教師が騙しているのではない。子供達が欺いているのでもない。父親自身が特別なにかの自己暗示に酔おうとしているわけでもない。あえていえば、三者が三竦みのようにしてあの欺瞞性を支えているのだ。それぞれが自分の嘘に耐えている。そこを突破するには、あのわざとらしさの衣裳に身を包むしかない。そしてその欺瞞の出発点にあり、中核にあるのは、やはり「父親」という存在なのだ、とぼくには思えてならない。父親自身というより、三者に見られたものとしての「父親」なのである。教えを受ける生徒の保護者としての、子供達の男親としての、そしてなにやらそういう役目をひき受けさせられているらしい自分としての「父親」——。

ウイークデーの彼は、街の中で特別に人目につくこともなく、もっとひっそりと働いていることだろう。いや、日曜日であったとしても、家族の多少の非難を覚悟の上で早朝からゴルフに出かけたり、たまの朝寝坊を楽しんだり、ぼんやりとテレビを見たりして休日を過ごす彼は、せい

ぜい中年のダメなパパとして市民生活の襞の中に織り込まれているに違いない。

それが父親参観日には俄かに別の顔をつけて学校へと駆り出されるわけである。幼稚園ともなればその演出は一段と凝ったものになり、「父の日」と「父親参観日」が重ねられて、幼児達はわけもわからずやたらにパパの絵を描かされたりパパに感謝の言葉を捧げたりすることとなる。

父親と日曜日という組合せで思い出されるものがもう一つある。NHKテレビで日曜日の夜八時前に放送される「減点パパ」という番組がそれだ。最近ではパパに限定しないという意味で「減点ファミリー」と改名されたようだが、依然としてパパの出演が中心になっている。俳優や落語家やマジシャンや、そういう有名人の小さな子供を招き、三波伸介が子供に父親の特徴をききながら似顔絵を描く。さて次に、当の父親が登場して三波伸介から自分の子供に関する質問を受け、正しく答えられないと減点の×印が似顔絵の上に貼りつけられていくという番組である。まだ幼い子供と三波伸介のやり取りが面白いのだが、もう一つ興味をひかれるのは、父親と子供との間にちょっとした距離が見える点である。父親は小さなことになると意外に子供のことを知らない。自分の子供が今なにをして遊ぶのを一番好んでいるかとか、将来はなにになろうと思っているかとか、どんな歌がうまいかとか——。そこに減点の材料が生まれるのであり、遊びとしての番組が成立することになる。あれが母親であったなら、おそらく彼女は知り過ぎた女なのであり、減点の可能性があまりに少なくて遊びにはならないだろう。

ところで、その「減点パパ」の末尾で、出場した子供が父親について書いた（または父親に向けて書いた）作文を読むことになっている。自分の子供に目の前で作文を読まれた父親は、照れたり、笑い出したり、時によってはじいんと目頭を熱くしたりする次第となる。テレビの視聴者

にとってはそのすべてが面白いという仕掛けになっている。ぼくがいつも気になるのは、幼い声で懸命に読み上げられるその作文の最後の一行なのである。日頃忙しくて家にいることの少ない父親への、もっと一緒に遊んでほしいとの注文や、その他の不満や希望が色々と書きつけられた末、おしまいに必ず、でもそういうパパが自分は大好きなのであり、どうか丈夫で長生きしてほしいといった一句がつけ加えられて作文は終わりとなる。子供には一気に読み下されてしまうこの一行は、しかしそこまでの希望や注文を述べたてた文章とどうも肌合いが違っているような気がしてならない。つまり、わざとらしいのである。その白々とした一行を置くことによって、しかし作文はまことに具合のよいまとまりを見せて完結する。

考えてみれば、いつもは家族として同じ家の中で生活している親と子が、わざわざ人様の前に時間をおいて別に出て小さな秘密を当ててみたりするのだから、この番組そのものがわざとらしいのは当然である。「父親参観」のわざとらしさが避けようとしても避けることの出来ぬものであったとしたら、「減点パパ」のわざとらしさは、むしろその避け得ぬものに注目して、不可避のそれを積極的な遊びにまで転化したものだといえるだろう。その意味では、「減点パパ」としてブラウン管に登場してくる（つまり家庭の居間に映像として送られてくる）あの父親は、典型的な現代の父親像の存在の仕方を示しているようでもある。

2

このようなわざとらしい父親像、白々しいパパ・イメージはどこから生まれて来たのであろうか。そのことについて性急に考えをめぐらす前に、一篇の短い小説に触れたいと思う。

日本の文学にも外国文学にも、親と子の関係をテーマにした作品は少なくない。特に日本の近代文学以降の小説には父を子の側から描いた優れた作品が多いように思われる。その中でも、特別に父親像の鮮明なものとしてぼくが忘れ難いのは武田泰淳氏の『父子の情』という短篇である（昭和二十七年発表・筑摩書房版『武田泰淳全集』第四巻所収）。

小説の中に作者をはじめ幾人もの実在の人物の名前がそのまま出てくるところから、これは自伝的な色彩の濃い作品であると考えてよさそうである。

ここに登場する父親は、今は失われてしまったとされることの多い一昔前のいかめしい父親の風格などを決して備えてはいない点が興味深い。「慈父と言うべきであろうが、慈父であるぞよと自己の存在を主張する人物ではなかった。息子にとっては、まことにくみしやすき相手、世界中で一番危険性のない年長者である。」と作者はまず父親を描きはじめる。借金を背負いこんだ寺の住職として経営の苦労を重ねながら、父は中学にはいった息子のために毎晩英語と漢文の学習を二年間指導しつづける。しかしそれを過ぎると父親はぴたりと口をとざしてしまう。「まるで指導するのを恥ずかしがるような放任主義で終始した」ということになる。

やがて思想運動に近づき、昭和初めの頃の非合法活動に関係した息子が警察に拘留されると父親は面会に来る。父の苦衷を察したことのない息子は「警察署の楼上に於て、面会の父と理論闘争もしかねまじき勢いであった。父は白きハンケチをズボンのポケットよりひき出し、無言で拘留中の子に手わたした。子は鼻をわずらって、絶えず多量の鼻汁を流していたからである。怒罵もせず、泣き落しもせず、父は子が大学中途退学を決した日、ヘーゲル全集を子の机上に贈った。」と武田氏は書く。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com